

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代(9)

遠田雄志 / 小川 格*

<p>目次</p> <p>はじめに</p> <p>I. 組織としての江戸時代</p> <p>1. 組織の常識</p> <p>1.1 鎖国</p> <p>1.2 米本位制</p> <p>1.3 参勤交代</p> <p>1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)</p> <p>2. 成長ゆえの衰退</p> <p>2.1 武士が武器を独占した社会</p> <p>2.2 家康を支えた譜代家臣団</p> <p>2.3 徳川幕府の金, 物, 人</p> <p>2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折 (以上第47巻1号)</p> <p>3. 変化の気づきと互解</p> <p>3.1 海外事情</p> <p>3.2 田沼意次</p> <p>3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)</p> <p>4. 常識の更新</p> <p>組織の適応モデル</p> <p>4.1 尊皇攘夷</p> <p>4.2 志士という名のアジテーター</p> <p>4.3 適塾と蘭学の行方</p> <p>4.4 幕末そして維新のあけぼの (以上第47巻3号)</p> <p>II. 江戸時代の春夏秋冬</p> <p>組織の適応過程</p> <p>1. 春</p> <p>1.1 最後の戦争</p> <p>1.2 改易と浪人の激増 (以上第47巻4号)</p> <p>1.3 将軍と天皇</p> <p>1.4 鎖国への道のり (以上第48巻1号)</p>	<p>2. 夏</p> <p>2.1 元禄時代</p> <p>2.2 5代将軍綱吉と生類憐れみの令</p> <p>2.3 赤穂浪士の忠義</p> <p>2.4 芭蕉を生んだ元禄時代 (以上第48巻2号)</p> <p>3. 秋</p> <p>3.1 吉宗と常識</p> <p>3.2 吉宗と田沼の政治手法</p> <p>3.3 定信の目指したもの</p> <p>3.4 本居宣長と国学の発展 (以上第48巻3号)</p> <p>4. 冬</p> <p>4.1 大江戸ワンダーランド</p> <p>4.2 鎖国から開国へ (以上本号)</p> <p>III. 江戸時代の意味するもの</p> <p>おわりに</p> <p>4. 冬</p> <p>組織の秋に続く冬は、組織の盛衰サイクルの保守局面の後期で同じく動乱期の前期である。この頃になると、秋に始まった長期低落傾向はいっこうにおさまらず、このままでは組織は危ないと感ずる人たちがいよいよ多くなってゆく。しかし、権力を握っている“守旧派”は、既得権益をあくまで守ろうとする(原発に対し政治家、官僚、御用学者や「大本営」ジャーナリストがこの期に及んでもなお推進しようとする謎を解く鍵はこの文脈にある)。</p> <p>この時期、既存の常識は変わりゆく環境にますますそぐわなくなり、予期せぬ事柄がしばし</p>
--	--

*編集事務所南風舎顧問

ば生ずるようになる。不安が募ってゆき、それが「常識の差戻力あるいは、常識への「未練のハードル」を超えるほどになると、にわかには怪し気なものを含め多種多様な互解が生まれ広まってゆく。そうした互解の力が「常識の拒否力」あるいは新奇なものに対する「臆病のハードル」を超えるほどになると一気に常識への信頼が失われてゆく。組織は騒然となり、「現状をかえなければ」と考える人たちが急増し、そうした中から“先駆派”が形成される（「常識の差戻力」と「常識の拒否力」については本誌第46巻第4号の「1. 組織の常識」を参照されたい）。

先駆派は当然の事ながら、組織の現在の秩序を変えようとする。守旧派は、そうした人たちが運動を権力をもって押さえ込もうとする。もっとも、抵抗と弾圧は、組織のほかの季節にも見られる現象である。しかし、組織の冬におけるそれは組織の存亡をかけたものできわめて激しい。それゆえ、この時期を動乱期と呼ぶ。なお、組織の春も同じ意味で動乱期である。両者の違いは一般的に言って、組織の春においては、権力者の改革派は新鮮であるのに、冬の守旧派は疲弊している。これが自然の流れというものである。しかし、それに反して守旧派がいつまでも元気であると、組織の再生が妨げられ、やがて組織は廃れてゆく。この意味で組織の冬はきわめて重要な時なのである。

それでは、江戸時代の冬はどうであったのか。その頃の環境はどのようになっていたのか。守旧派は、どんな人たちで、どのようふるまったのか。どんな人たちが、先駆派で、彼らはどんな思想をもちどのような活動を展開したのか。そして、江戸時代の冬という最終局面でその時々々の将軍はどのようふるまい、それが日本という組織の再生にいかなる影響を及ぼしたのか？

4.1 大江戸ワンダーランド

11代将軍家斉の時代

江戸時代も200年も経つと、良くも悪くもこの間に蓄積された独特の習慣が強い自己主張を示し始める。200年の鎖国は、他の文化の影響を最小限にまで閉め出し、自国の中で純粋培養

して醜酔した各種の行動様式が政治から文化、日常生活のすみずみまであらゆる分野を覆い尽くす。こうして世界に比類のないユニークな江戸文化が成熟していったのである。世界に比類のない美しい浮世絵のようなものから、切腹のようなグロテスクな行為も当然のように行われていた。それを西欧諸国から見れば類いのない未知のワンダーランドに見えたのは不思議ではない。

政権の頂点では、オットセイとあだ名をつけられた第11代将軍家斉（いえなり）が、50年に及ぶ治世の中で40人の側室から55人の子どもをもうけ、さらにこの将軍に追従する老中をはじめ譜代の家臣たちにとりまかれて、迫り来る内外の危機から目をそむけてひたすら安逸を貪っていた。

将軍の最大の関心事は、大勢の子どもたちの嫁入り先、養子の受け入れ先であった。老中はこのため家柄のよい年頃のお相手を求めて大名たちとの交渉に余念がなかった。将軍の子どもを押し付けられた大名は、御三家をはじめ、会津藩、仙台藩、加賀藩、福井藩など36にもものぼり、それらの藩は余計な負担に泣かされたが、その対価として借金の帳消し、所領の拡大など無心を繰り返した。当然の帰結として賄賂は横行し、不正がまかり通った。さらに肥大化した大奥の贅沢はとどまるところを知らず、将軍から寵愛された側室は隠然たる勢力を形成して、人事など政治に介入した。

将軍家斉の第21女溶姫（ようひめ）は加賀藩第13代藩主前田斉康（なりやす）に輿入れした。外様の加賀藩では、徳川家から溶姫を押し付けられていやいやながらも迎合して、本郷の上屋敷に豪華な朱塗りの門を建てて溶姫を迎え入れた。溶姫につき従ってきた女中たちは徳川家の権威を笠に着て周りを困らせたといわれている。権力による押しつけに対して追従という、幕府と加賀藩のゆがんだ関係を示す朱塗りの門が、今日もなお東京大学のシンボル赤門として残されていることは歴史の皮肉というほかない。

文化文政時代

他方、市民生活に目を向けると、人口100万

人という世界最大の都市江戸では、歌舞伎、浮世絵をはじめとして空前の享楽的な文化が繁栄をきわめ、いわゆる文化文政時代の江戸文化が絢爛豪華に開花していた。

元禄時代の尾形光琳に学んだ酒井抱一（さかいほういつ）は「夏秋草図屏風」（1821）をはじめとする繊細な感覚を生かした絢爛たる琳派の最後の華を咲かせていた。また俳句では小林一茶が出ている。そして、浮世絵は喜多川歌麿、安藤広重、葛飾北斎、東洲斎写楽そして歌川国芳と黄金期を迎えていた。歌舞伎役者を題材にした役者絵、遊女らを題材にした美人画をはじめ、北斎の「富嶽三十六景」、広重の「東海道五十三次」などの風景画が最高のレベルに達し、中でも写楽の役者絵は今日なお世界が注目する最高傑作といわれている。浮世絵は主に版画として普及発展したが、そのためには、版元、画工、彫り師、刷り師と高い技術と高度に発達した分業体制によって大量生産され、それを庶民が競って買い求めるという成熟した大衆消費社会が支えていた。それは豪商をパトロンとした元禄時代の文化とこの時代の化政文化を分かち大きな違いであった。

組織の冬ともいべきこの時代にこうした権力の腐敗と大衆文化の成熟という状況が同時に進行したのは、決して偶然ではない。その原因が徳川幕府の体制そのものの中に埋め込まれた、組織の本質に根ざしていたからである。

徳川幕藩体制は徳川家が権力を独占し、代々世襲することを根幹として形成された。そのためには権力構造の固定化が大前提であり、組織を更新する仕組みがそもそも考慮されていなかったのである。

このため、権力を奪い合う争いがおこることはなく、権力の基盤は安定していた。200年の平和の基本的な条件はまずここにあった。庶民は戦いに巻き込まれる心配はなく、平和の果実を満喫できたのである。この結果、本来戦いを本分とする武士は戦いを忘れ、武器、戦争技術の進歩はなく、戦国時代から停滞したままでここまでできてしまった。さらに、将軍は争わずに権力を手中にしたから、当然のこととして権力の内部は腐敗した。

この過程を同時代のヨーロッパと比較するなら、江戸時代がいかにか特異な社会であったか、あらためて驚かされる。ヨーロッパでは打ち続く戦争のため、戦争の技術は発達したが、膨大な市民が犠牲になり、苦しめられた。例えばフランス革命とナポレオン戦争の犠牲者は500万人、30年戦争の犠牲者は400万人に達すると言われている。しかし西欧世界では、多くの犠牲を払って次々と市民革命をなしとげ、世襲王族による支配を倒して市民が権力を握っていった。これに対して、我が国はいつまでも徳川家の支配に甘んじていた。この時期大量の出版物も刊行されたが、幕政批判は厳重に罰せられたため、表現は屈折し、皮肉やもじりなどに逃避した。出版文化が発達したといっても表現の自由はなかったし、江戸時代の市民が都市文化を満喫できたのは、きわめて特異なこの時代の制約の枠の中だったのである。

大塩平八郎の乱

しかし、この状況は良い結果ばかりではなかった。いったん冷害など不作がおこると広範囲に飢饉が広がった。豪商は米を買い占め、行政の当局者はお上の顔色のみうかがって、庶民の苦しみを顧みることがなかった。

このため、天変地異の続いたこのころ、全国で一揆が続発し、その数は江戸時代を通して最大の件数に達していたのである。

そんな時であった。大坂東町奉行の元与力大塩平八郎が立ち上がった（1837年）。繰り返し当局者へ救済を提言したにも関わらず無視された。当局は庶民の困窮を顧みず、その上將軍代替わりの祝賀のため、米を江戸へ集めさせた。大坂東町奉行が米を買い集めたのはこのためだった。さらに当局と結託した豪商が米の買い占めを続け私腹を肥やしていた。大塩は書籍124冊など全財産を処分して、近郷の貧民に配分し、大砲をはじめとする武器を購入して、自宅に火を放った。それが蜂起の合図であった。門人たちをはじめ大勢の貧民を巻き込んだ大塩の反乱は半日で鎮圧されたものの、元役人が幕府に対して公然と反乱決起したこの事件は前代未聞のものであり、その影響は甚大であった。大塩自

身は民家に潜伏し、40日後に発見されると用意していた火薬で爆死した。知行合一を信条とする陽明学者らしい大塩の行動は各地に共鳴者を生み、大塩の撒いた決起をうながす檄文は各地でひそかに回覧され、習字のお手本にまでされ、各地で大塩に同調する一揆が続発したといわれている。

天保の改革

家斉の将軍そして引退後の大御所時代を通した50年にわたる政治は放任主義、放漫財政が続いたから、幕府の財政は破綻していた。なにしろ毎年の支出は年貢収入の二倍に達していたのである。その穴埋めは貨幣の改鑄に頼っていた。金銀の含有率を半分にして、倍の貨幣を鑄造するものであったから、幕府は巨額の益金を手に入れたが、市中には悪貨があふれ、物価は高騰した。このため、財政はますます悪化するという悪循環に陥っていたのである。

また、家斉の53子齊省（なりさだ）を養子に迎えた川越藩松平家は極度に窮乏化していたため、この機会を利用して有利な領地への所替えを画策し、出羽庄内へ、出羽庄内藩酒井家を越後長岡へ、越後長岡藩牧野家を川越へ、いわゆる三方領地替えを要求した。将軍もこれを認め、命じたが、明らかに年貢の増える川越のほかは、庄内も長岡も猛反対であり、百姓から大名までの激しい抵抗にあい、ついに断念せざるを得なかった。

こんな状況に対して立ち上がったのが筆頭老中水野忠邦であった。将軍を引退したあとも大御所として君臨した家斉の死去をまっぴらにいわゆる「天保の改革」が始まった。しかし、そのスローガンは享保の改革と寛政の改革を手本とする後ろ向きなものばかりであった。大奥の肅正、奢侈禁止、歌舞伎の禁止をはじめとする財政緊縮、綱紀肅正が中心であった。このため繁栄を誇った江戸の町は火の消えたように静まり返った。しかし、江戸の行き過ぎた奢侈が農村から人々を吸い寄せ、都市には貧民が集まり、これこそ諸悪の根源と考える忠邦は都市の経済の停滞こそ必要として強い態度で取り締まりを続けた。

しかし、これだけではあまりにも後ろ向きだ。そこで幕臣たちから改革のアイデアを募り、始まったのが、上知令、印旛沼開拓、御料所改革などであった。しかし、江戸や大坂の周辺10里四方を幕府直轄地にする上知令（じょうちれい）は大名や旗本の強い抵抗にあって挫折、印旛沼干拓は工事を命じられた5大名の不満と大雨のため行き詰まり失敗。ついに忠邦は2年ほどで失脚した（1841～43年）。このあとは幕末の争乱へとなだれ込むことになる。

4.2 鎖国から開国へ

冬の時代と常識

このころ洪水や疫病そして飢饉が続き、そのうえ異国船が頻々と来航して、この国はなにやら不穏な空気に包まれていた。ここから明治維新まで、前代未聞の騒然とした数十年間を経て、ついに徳川幕府は崩壊し、江戸時代は終焉をむかえる。260年という長期間、平和で安定した体制を維持しながら、ついにこの体制は崩壊するのである。巨大な体制が崩壊するとはいったいどういうことなのか、どんなメカニズムが働くのか、ここでいったん視点を変えて、組織論の方法、組織の適応モデルを使って徳川幕藩体制崩壊の過程を解明していきたい。

そこで江戸時代を規定してきた四つの常識の冬の時代におけるそれぞれの実態を検討してみよう。

まず「参勤交代」であるが、当初のねらいである大名たちが将軍に恭順の意を示し、妻子を人質として江戸にとどめ置くという目的は、すでに必要性を失っていたにもかかわらず、惰性的に行われていた。諸大名は多大な出費を強いられるかわりに、本来諸大名をばらばらに隔離する幕府の方針にもかかわらず、参勤交代のおかげで江戸では情報を交換し、連携することが可能になっていた。さらに参勤交代のために五街道をはじめ交通網は整備され、二百数十の藩が割拠する幕藩体制にもかかわらず全国の一体化が進んでいった。つまり参勤交代は形式は維持されていたものの、それがはからずも次の中央集権の社会を用意するかのように機能する厄介な存在となっていたのである。

つぎに「米本位」の常識について見ると、その中核をなす年貢は当初から徳川幕府の徴税システムの基本であり、幕府のみならず諸藩経済の根幹をなすものであった。ところが米以外の生産物の割合が年々拡大し、産物は貨幣に交換され、実際に経済を動かすものは米から貨幣へと変化し、経済は商人の手に握られていった。この時代になると、幕府のみならず米に依存していた藩が商人からの借金なくしては経済が成り立たなくなってしまった。米経済は破綻の寸前まできていたのである。

「身分制」については、本来、士農工商の最上層に武士、最下層に商人を位置づけていたのだが、経済を商人が牛耳っていたから、武士が権力を握っていたにもかかわらず、商人に頭が上がりなくなってしまった。資金力や能力のある百姓や商人には名字帯刀を許し、武士の仲間入りが許された。建前は武士が最上位に君臨し誇りも気位も高かったが、実は武士は困窮し日々の暮らしに苦しんでいた。身分制は形だけはなんとか保たれていたものの、内容が伴わず空洞化していたのである。支配階級が貧困化してゆくような体制がこんなに続いたこと自体が奇跡的なことではないだろうか。

以上三つの常識が、変化した環境と乖離し、不具合が露呈していることが明らかであるが、この時期にもっとも注目しなければならないのは、「鎖国」の常識をめぐる環境であった。

200年の間に日本を取り巻く環境は激変し、鎖国体制は危機に瀕していた。そして、鎖国が開国かを巡って幕末の争乱は繰り広げられたのである。いいかえれば「鎖国の常識」をめぐる対立があきらかになり、激化し、ついに幕府は崩壊し、江戸時代が終焉を迎えたのである。

鎖国をめぐる環境

そこで、鎖国をめぐる環境がどのように変質していったのかを中心にして、この時期を見直してみよう。

徳川幕府の初期、鎖国の政策が始まった三代将軍家光の時代、このころ世界はまだ大航海時代の最後の局面にあった。世界を二分していたポルトガルとスペインがようやく退場し、イギ

リス、オランダに覇権を譲った時代である。ポルトガルやスペインはキリスト教の布教を武器にしてゆくゆくは植民地化まで視野にいたった政策を世界各地、特に中南米で激しく進めていた。この両国はその余波をかって日本にかかわってきた。幕府はこれら両国の宣教師を閉め出すことを中心に、キリシタンの禁止、スペイン、ポルトガル船の来航禁止、日本人の出入国禁止、大船建造の禁止など一連の政策を断行し、のちに鎖国と呼ばれる状況に閉じこもった。しかし、イギリスがスペインの無敵艦隊をやぶり(1588)海上の支配権をにぎると、スペイン、ポルトガルに代わってイギリスとオランダが東インド会社を設立し、次第にアジアへの進出を加速した。イギリスは世界最大の海軍を保有し、世界の海洋を支配し、さらに国内では産業革命を遂行し、18世紀半ばには蒸気機関を発明し、工場製の大量の木綿製品を売り捌くために世界各地、特にインドの植民地化を進めた。もちろん他の西欧諸国もそれに続いた。1800年ころ世界は市場獲得のための第二次大航海時代に突入していたのである。

スペインとポルトガルが宣教師を送り込もうと機会をうかがっていた時代と、200年後のイギリスを先頭として市場を求めて接近してきた時代、日本をとりまく環境は大きく変化してしまったため、幕府の鎖国の常識は適合できなくなっていた。鎖国の実質的な内容である、キリシタンはすでに国家の安危にかかわるような問題ではなくなっていたし、スペイン、ポルトガルは弱小国になっていた。逆に貿易の制限、出入国の禁止、大船建造の禁止のために自分の手足を縛っている現状は文明の進化から取り残され、不都合きわまりないものになっていたのである。それにもかかわらず一度強固に完成した常識は簡単には変わることができない。環境と常識が乖離してきたわけだ。その変化を敏感に察知して警鐘をならす先駆者が現れた。と同時に常識を死守しようとする守旧派も巻き返しのために暗躍した。

異国船の来航

この時期、1800年から1868まで、ほぼ70年の

期間をすこし詳しく見てゆくことにしよう。この期間に環境を大きく変える二つの大事件があった。一つはアヘン戦争、次がペリーの来航である。この二つの事件を境にしてこの時代を三つのエポックに分けることができる。はじめはアヘン戦争までの約40年間、次はペリー来航までの約10年間、最後が明治維新までの約15年間である。

まず最初のエポックであるが、ちょうどこの頃から日本各地の沿岸で顕著に見られる現象があった。それは異国船の来航である。ほとんど毎年のように沖縄から北海道まで、日本各地の海岸で異国船が目撃され、あるいは異人が上陸している。

異国船の来航といってもその目的は一様ではない。鎖国前の南蛮船の来航の目的は、貿易のほかキリスト教の布教と領土への野心があった。しかし、この時期の異国船の目的は主として以下の3点に要約できる。

1. 薪炭および水、食料の補給を目的としたもの。
2. 交易を目的としたもの。
3. 日本人漂流民を送り届けるためのもの。

以上、三つが主な目的であった。中には漂流民の引き渡しを手がかりにして、交易を迫るものもあった。これに対し我が国は前例がないため、対処の方法がわからない、水や食料だけ与えていいものか、漂流民を受け入れてもいいものか、そんな事をすれば幕府から厳しく叱責されるかもしれないのである。なにしろ鎖国の掟は厳格だったから、恐れるのも当然であった。当事者である藩でも、おうかがいをたてられた幕府も対応に苦慮した。基本的には、鎖国を維持して交渉を拒絶し、追い返したのであるが、人道的な立場から杓子定規に追い返すわけにもいかず、非常に困惑した。

この時期に外国船の来航が増えた理由は、西欧諸国が長年の戦乱を乗り越えて統一国家を形成し、さらに産業革命を成し遂げて、大量に生産した綿織物などの商品売り込むため市場を求めて、一斉にアジアへ進出したためである。特にいち早く産業革命を成し遂げたイギリスの

動きが活発で、中国を支配下におき（香港割譲1842）、インドの植民地化をなしとげ（1858）、同時に日本を視野において接近してきたのである。アジア各地で西欧諸国による植民地化が進み、最後に残されたのは、タイ、韓国、そして日本であった。

アメリカの場合は少し事情がことなり、太平洋における捕鯨のための補給基地として日本を必要としていた。このころアメリカは捕鯨産業がピークに達しており、多数の捕鯨船が太平洋を走り回っていた。彼らの捕鯨の目的は鯨の肉ではなく脂であった。産業革命の結果、機械を運転するための潤滑油として鯨の脂が必要だったのである。メルビルが鯨との格闘をテーマとする小説『白鯨』を書いたのは1851年のことであった。また、アメリカも工業製品の市場を求めてアジア進出を始めていたが、広大な太平洋を渡ってきた船にとって、食料や石炭の補給基地として日本は絶好の位置にあった。日本を最も切実に必要としていたのは実はアメリカだったのである。これは、その後今日にいたるまで、アメリカの対日政策の基本となっている。

鎖国の再確認と文化露寇

しかし、この時期、日本に対して最も早く行動を起こしたのはロシアであった。シベリアからカラフト、千島列島はアザラシやラッコの毛皮などの重要な産地であったが、食料補給は困難を極めた。当然日本は補給基地として絶好の位置にあり、その開港が強く求められた。ロシアはシベリア開発の最前線基地として日本に狙いを定めた。

1792年ロシアのラクスマンが帆船エカテリーナ号に乗って根室に来航した。女帝エカテリーナ二世が派遣したこの船には漂流民大黒屋光太夫とその仲間を乗せており、彼らを引き渡すかわりに通商交渉を求めた。ロシアは鎖国日本の扉をこじ開ける政策を模索していたところへ光太夫が現れたため、女帝エカテリーナは絶好のチャンスとして光太夫の帰国を利用したのである。

しかし、筆頭老中松平定信は光太夫を受け取りながら、長崎での交渉を約束して追い返した。

このため12年後の1804年こんどは全権使節レザノフが軍艦ナデジュタ号に乗って長崎へ入港した。レザノフはラクスマンとの約束つまり長崎での交渉の履行を幕府に求めたが、幽閉同然のあつかいで半年も待たせたあげく幕府の返答は「鎖国の祖法」を口実に、贈物は拒否、通商はゆるさない、ただちに退去せよという冷淡なものであった。激怒したレザノフは樺太やエトロフなど千島諸島を荒し回るよう仲間に示唆した。いわゆる文化露寇といわれる事件である。

こうした状況に幕府は危機感を強め、調査隊を派遣して、北方の実情を把握し、蝦夷地を幕府直轄地にするなど対策にのりだしたが、なにしろ広大で、寒冷なこの北方地域を調査することは容易なことではない。

冬の時代の第一幕はこうして北方ロシアからの接近としてはじまり、それによって北方への関心に目覚めたものの、こうしたロシアの接近に対し、幕府は事態の本質を理解することができず、鎖国の常識を再確認することで幕引きをはかった。

しかし、こうした異国船のたび重なる来航は明らかに時代の大きな転機を示唆するものだったのである。江戸初期の世界は第一次の大航海時代のさなかにあつて、主としてポルトガルとスペインによるキリスト教布教に対抗して鎖国の常識が作られたのだが、19世紀、産業革命を終えた西洋諸国は植民地争奪の第二次大航海時代へと突入しており、当然あらたな対応策が必要であった。

先覚者の警告

この状況にいち早く気がつき、警鐘を鳴らし、海防の必要性を説き、武力の増強を主張したのは、民間の先覚者たちであった。

最初に警鐘をならしたのが、仙台藩の林子平であった。1791年『海国兵談』全16巻を著し、その中で「日本橋からロンドンまで海に境界はなくつながっており、長崎だけ厳重に警戒しても江戸の防衛体制がまったくできていないのでは役にたたない。全国の主要港湾を防御する必要がある。それにはヨーロッパのような堅牢な艦船を建造して侵略に対処すべきだ」と説いた。

子平は長崎や蝦夷地に足をはこび、日本をとりまく状況がただならぬことになっていることを憂慮して、苦心の末、出版にこぎ着けたのであった。しかし、これに対して時の老中松平定信は子平の意見に耳を傾げるかわりに、「奇怪異説」を説いて人心を惑わしたとして蟄居謹慎の処分とし、さらに版木を没収した(1792)。

ところが、子平の予言は的中し、その四ヶ月後にラクスマンが来航したのである。子平の警告はきわめて適切であったが、幕府は批判を嫌い、つまり「互解」の広がるのをおそれて口を封じたと理解できる。

子平のように危機感を抱いてそれを行動にうつしたのも少なくない。まず最上徳内は1789年蝦夷地調査団に参加し、エトロフ、ウルップの調査を行っている。間宮林蔵は、探検旅行によって樺太が半島ではなく大陸から離れた島であることを世界で初めて明らかにした。この事実はシーボルトによってヨーロッパに紹介され、西欧世界に驚きをあたえた。伊能忠敬は北海道を踏破して測量し、その正確な地図を作成した。その後日本中に足をのばして17年間に渡って測量を続け、ついに1822年きわめて精度の高い「大日本沿海実測地図」を完成し、我が国の全体像を明らかにした。あたかも世界の要請にこたえるかのようにきわめて適切な時に、きわめてふさわしい人物が登場したことに驚かされる。

蘭学者たちが海外の知識をどん欲に吸収し普及していったことも見逃せない。『解体新書』を訳した杉田玄白、前野良沢らがその先駆者である。続く渡辺華山、高野長英なども見逃せない。漂流民7人を送り届けるために江戸湾へ来航したモリソン号を幕府の定めた打払令に基づいて砲撃しそのまま追い返したモリソン号事件に触発されて、長英が『夢物語』を書いて国際道義から打払令を批判し、華山が『慎機論』を書いて海防の観点から鎖国政策を批判した。これが見とがめられて、二人は捕らえられた。「蚕社の獄」(1839)と呼ばれる事件である。蚕社とは「尚齒会」とも呼ばれ、長英や華山など一流の蘭学者を中心に情報交換のために集まったグループであり、幕臣の勘定吟味役川路聖謨

(としあきら) や江川英龍 (ひでたつ) なども加わっていた。この事件は目付の鳥居耀蔵が仕組んだでっち上げであった。鳥居耀蔵は儒学の元締め、林述斎 (じゅつさい) の子で蘭学を忌み嫌い目付の立場から洋学を弾圧し「妖怪」と恐れられていた。

このような時代の状況を背景として見ると、1823年にシーボルトが来日したのも、欧米諸国の日本への大きな関心を背景としていることが感じられる。シーボルトは医学を手がかりにして来日し、医療活動のかたわら、長崎に塾を開設した。シーボルトのもとには全国から150人にもものぼる生徒が入門し、医学の学習の傍ら、シーボルトから与えられた日本研究のテーマをレポートにまとめて提出した。こうしてシーボルトは日本の実情を調査し、膨大な資料を持ち帰り、以後ヨーロッパにおける日本研究の基礎を築いた。シーボルトはまるで西欧諸国から日本探索の使命を与えられていたかのように、組織的・体系的に日本の資料を大量に収集し持ち帰った。帰国の直前、積み荷の中から伊能測量の日本地図が発見され、シーボルトのほか多くの門人が処刑されるシーボルト事件を引き起こしたが、彼が日本地図をどうしても入手したかったのも、西欧諸国の日本に対する強い関心を考えれば、当然のことであった。のちに黒船で来日するペリーは日本渡航の前にシーボルトの報告を熱心に研究したといわれている。

彼らは、鎖国の常識に対して、風穴をあけた先駆者である。間宮林蔵の場合はロシア領へ足を踏み入れることは、明らかに鎖国の禁制にふれるため、おおいに迷ったが、死罪を覚悟して海峡を渡りロシア領へ踏み込んだ。他の人々も多かれ少なかれ常識との葛藤の末、勇氣ある一步を踏み出したにちがいない。だが、しかし、このころはまだ鎖国の常識に対して海防の必要性を説く議論が出てきたものの、開国を主張する所までは至っていない。

この第一のエポックの約40年間、異国船の来航に対して幕府は鎖国を祖法としてしがみつき、これに対して、日本の国土の境界に目を向け、海防の必要性を力説する先覚者があらわれた。しかし、この時期の議論は主として海防、つま

り海岸線の防衛に終始した。あくまでも鎖国を前提として防衛の必要を訴えたものであった。

アヘン戦争と徳丸が原

そんな時、日本人に大きな衝撃を与えたのがアヘン戦争のニュースであった。

ことの発端は紅茶だった。紅茶は17世紀末から18世紀にかけてイギリスの上流階級で大流行し、18世紀中頃になると一般庶民の間まで普及し、輸入が急増した。このため中国に支払う銀が激増し、なんとか銀に代わる商品がないかと探した結果、目を付けたのがアヘンであった。イギリスはインドでアヘンを大規模に栽培し、これを茶の代価として中国に輸出した。1800ころになるとアヘンの中国への流入は激増し、大きな社会問題になってきた。このアヘン貿易を担ったのがジャーディンやマジソンという商人たちだった。

この事態に危機感を抱いた清の道光帝はアヘンの輸入を禁止するとともに林則徐を臨時の特命大臣つまり欽差大臣に任命した。林則徐は1839年広東に着任するとともにアヘン輸入業者を処分し、イギリス商館を封鎖、アヘン2万箱を没収し、焼却した。

これに怒ったイギリス商人たちは政府に泣きついた。イギリス議会では、大義名分のない不名誉な戦争だとする反対を押し切って出兵を可決、4千人の陸軍、16隻の軍艦の他、多数の輸送船団という大部隊を派遣して、アヘン戦争が始まった。圧倒的な戦力の差に物を言わせて、戦いは終始イギリスのペースで進み、2年後には北京にまで達した。

1842年中国は降伏し、香港を割譲、広州、上海など5港を屈辱的な条件で開放するなどを内容とする南京条約を締結した。フランス、アメリカなどはさっそく同じ条件の条約を要求し、中国は西欧各国の餌食にされた。

このアヘン戦争の情報は、開戦と同時にいち早くオランダ船により長崎へもたらされ、以後、続々と戦争の推移、両軍の兵力などの詳細な情報もたらされた。オランダからの情報は、これまで、「風説書 (ふうせつがき)」として毎年幕府に提出されていたが、これとは別に「別段

風説書」が、極秘情報として江戸に運ばれた。

それまでの異国船の要求が水や食料など比較的穏やかなものであったのに対して、アヘン戦争のニュースは欧米帝国主義の侵略的な本質を明らかにし、幕府に深刻な衝撃をあたえた。

幕府がもっとも驚いたのは、大国として日本の前にそびえていた清国が、イギリスの攻撃にあっけなく敗北を喫したことであった。その結果西欧との圧倒的な武力の差を見せつけられ、日本にもその脅威が迫っていることを実感させられたのである。

徳川幕府は大坂夏の陣(1615)のあと元和偃武として武力に対して無関心になっていた。事実上、この200年間国内で戦争はなく、武器の改良や増強は一切行われてこなかった。したがって、アヘン戦争のニュースは日本にとって強烈な衝撃であった。日本は無防備のまま西欧諸国の強大な軍事力に包囲されている状態が明らかになったのだ。しかしこの事態に対してどう対処すればいいのか、その方法がわからなかった。

そこへ1840年、長崎の町年寄で砲術家の高島秋帆(しゅうはん)から一通の提言がとどいた。その中で秋帆は、清(しん)が負けているのは平生の武備を怠ったためであり、西欧諸国の来襲に備えるには日本も西洋の砲術を学んで、最新の火炮を早急に用意すべきであると主張した。「天保上書」といわれるものである。

困惑していた老中の水野忠邦はこの意見をとりあげ、秋帆を諸組与力格という格式の幕臣に登用し、翌1841年武蔵徳丸が原で砲術の実演をすることを命じた。秋帆の指揮のもと、門人らの銃隊99人、砲隊24人によりモルチール砲、ホイッスル砲などの発射実験が行われ、これを見守った幕府役人、諸大名は、隊員の洋装とともに爆弾の威力に驚かされた。幕府は秋帆に褒美を与えるとともに砲4門を買い上げた。アヘン戦争のニュースに接した幕府の対応は素早かった。

興味深いのは、高島秋帆という人物である。秋帆は長崎の町年寄、選ばれて出島の管理と警備をまかされていたとはいえあくまで商人である。しかも、個人で西洋の兵器の進んでいるこ

とに着目し、オランダ人に頼み込んで砲術を学び、さらに武器を購入して研究をすすめ、高島流砲術を完成し、各地から門人を受け入れていた。さらに町年寄の地位を利用して、オランダから大量の武器弾薬を輸入して、薩摩藩などに転売していた。彼はあくまでも商人だったので武器を輸入販売することに何のためらいもなかった。これだけでも驚くべきことであるが、さらに、幕府がこのような民間の砲術家を招いて教えを乞うという状況、つまり武士ではないこういう男が国防政策の表舞台に登場してきたことが、この時代の切迫した状況をよく表している。

幕府に認められた秋帆は、老中の指示により高島流砲術を伊豆韮山の代官江川英龍に伝授し、江川がさらに佐久間象山(ぞうざん)や幕臣の川路聖謨らに教えた。

信州松代の儒者佐久間象山は江戸に塾を開いて多くの門人を集めていたが、この時から蘭学が目覚め、西洋のあらゆる学問をどん欲に吸収し、砲術家としても急速に実力をつけ、1848年には自ら大砲の鑄造まで試みている。象山は改めて江戸に塾を開塾し、多くの門人を迎え入れ砲術のほか世界の情勢を説き、持論を展開した。弟子の中には後に活躍する吉田松陰、勝海舟、橋本左内らがいる。特に松陰は、象山の信念である西洋を見て西洋の文明を学んで日本を強くしなければならないという熱弁に共鳴し、密航を企てて自ら下田沖に停泊中のペリーの軍艦に小舟を漕ぎ寄せた。この密航が発覚したため、松陰とともに象山も捕らえられ、松代に塾居を命ぜられた。鎖国の掟はまだ生きていたのである。

しかし、象山の教えを受けた勝海舟が尊王攘夷に染まっていた坂本龍馬や西郷隆盛の目を開かせ開国へとその考えを導いた。高島秋帆の唱えた開国思想は、江川英龍、佐久間象山、勝海舟、坂本龍馬へと確実に伝達されたのである。こうして鎖国の常識に対して開国の互解が連鎖反応のように広がっていった。しかし、これはもう少し後のことである。

老中水野忠邦に認められた秋帆であったが、蘭学者たちを敵視していた目付鳥居耀蔵により、

ありもしない反逆罪をでっち上げられて逮捕され、10年に及ぶ長い獄中生活を余儀なくされた。守旧派の反撃であった。

アヘン戦争から黒船来航までの期間はちょうど水野忠邦による天保の改革の時代であり、忠邦の政権が秋帆を評価する開明派と敵視する耀蔵ら守旧派の両勢力の均衡の上に成立したものであったため、一方で秋帆をとりあげ、同時に逮捕するという矛盾した行動となったのであった。

このように、アヘン戦争後、冬の時代第二幕は、大砲の鑄造など急速に武備の拡充へと関心が向いて行ったが、それとともにじわりと開国の機運も浸透していったのである。ここでも民間の学者たちが議論と行動の先頭にたっていた。

幕府の内部でも開明的な老中を中心に若手官僚たちにより開国のための体制づくりがすすんでいた。

このころ、もっとも心配されたのが、江戸湾の防衛であった。100万人といわれた江戸の人口は、もっぱら大坂をはじめ日本各地から舟運で江戸湾に運びこまれる生活物資によって支えられていた。もし、数隻の軍艦に江戸湾の入口を封鎖されたら、一切の生活物資は途絶え、江戸はパニックに陥ると危惧されていた。そんな心配が次第に現実味を帯びて感じられてきたのである。このため江戸湾周辺の警備が重要な課題となった。

この第二のエポックは海防の必要性が痛感され、同時にそのためには西欧から技術を学ばなければならないとして鎖国と開国の板挟みになった。開国といってもあくまでも海防のために必要だからというもので、まだ海防が主目的であった。それにしても鎖国の常識がゆらぎ始めたのはたしかであった。

アヘン戦争の情報が入るや、幕府は武力では西欧諸国にはとてもかなわないと判断し、1842年には無二念打払い令（むにねんうちはらいれい）を引っ込め、薪水給与令を出した。無二念打払令は鎖国政策を再確認する政策であったが、薪炭給与令は鎖国の常識に修正を加えるものであった。言い方をかえれば、鎖国の常識を修正

するためにはアヘン戦争という大きな衝撃が必要だったのである。

ペリーの黒船来航

そんなとき、1853年ついにアメリカ東インド艦隊司令長官ペリー提督が大統領の国書をもって、4隻の黒船をつらねて長崎ではなく江戸湾の入口浦賀へやってきた。黒船のうち2隻は煙突から黒煙を吐き巨大な外輪で推進する世界最新鋭の蒸気船であった。

アメリカは、日本に開国を迫るために他の国とはまったく異なる方法をとった。第一に外交官ではなく、軍人に全権を与えて日本との交渉に当たらせた。しかもペリーは「蒸気海軍の父」といわれた辣腕の軍人であった。第二に最新鋭の蒸気船2隻と帆船2隻を連ねて臨んだ。しかもいずれも完全武装した軍艦であった。第三に江戸の玄関先浦賀へ船をつけた。そこは江戸湾の入口で最も狭くなった江戸への物流のど元であった。そして最後にとりあえず大統領の国書を手渡すことのみを目的をしぼった。

ペリーの狙いは凶星であった。交渉はアメリカのペースで進み、幕府は久里浜に応接所を設け、国書を受け取った。アメリカとの交渉は二段階となった。第一段階はペリー来航の翌年、ペリーの再来日によって日米和親条約が締結され、これによって下田と函館の2港が開港されたことにより、一区切りついた。これで鎖国の大原則の一角が崩れ、鎖国が終わった。

アメリカはその2年後、和親条約に基づいて下田にタウンゼント・ハリスを派遣し、駐日総領事館を開設した。さらにハリスの粘り強い交渉の結果、1858年日米修好通商条約が締結され、神奈川、兵庫、新潟の開港が決まり、鎖国は完全に終わった。以後各国がそれにならった。

鎖国にとどめを刺したのはアメリカだったのである。それは当時砲艦外交と呼ばれた強大な軍勢力を背景とした外交交渉だった。

こうして「冬の時代」の第三幕が切って落とされた。

アメリカとの一連の交渉を仕切ったのは、老中首座阿部正弘とそれを引き継いだ堀田正睦（まさよし）であり、交渉にあたったのは岩瀬忠

震(ただなる)をはじめとする開明的な幕府官僚であったが、この頃には幕府の首脳部は開国が当然と考えるようになっていた。諸外国の状況を見れば、鎖国など続けられるわけがないという認識に達していたのだ。問題は、諸外国の状況など情報が幕府に独占されており、ましてや開国の方針転換は国民にとって寝耳に水だったことである。

このため、条約の調印は、朝廷をはじめ、諸藩の下級藩士たちの激しい反対の壁にはばまれた。突如全国的に尊王攘夷のスローガンをかかげる反幕府の嵐が巻き起こった。条約自身は大老に就任した井伊直弼により調印されたが、これがさらなる騒動の出発点になった。

尊王攘夷と鎖国の常識

幕府は条約の締結と同時に大型の蒸気船をオランダに発注し、さらに、大型船の建造を指示した。そのうえ条約の調印文書を日本人の手でアメリカに届けることを申し出た。これが咸臨丸の渡米(1860年)であるが、これにより、公式に自国民の出国を宣言したのである。こうして、幕府は、開港、大船の建造、出入国の解禁と、鎖国の条件をつぎつぎに放棄した。

ところが、条約の調印をきっかけに、天皇の勅許のない調印は無効として、尊王攘夷の嵐が猛然とわき上がった。生麦事件、長州藩によるアメリカ、フランス、オランダの船に対する砲撃、薩英戦争、ハリスの通訳ヒュースケンの暗殺など、外国人に対する排撃運動が燃え上がった。

特に朝廷を抱き込んだ長州などの尊王攘夷の志士たちの活動が活発に展開された京都はテロと報復の戦場と化した。

幕府がすでに鎖国の常識を脱ぎ捨てようとしていたのに対し、天皇、諸藩の志士たちが、鎖国の常識にしがみついて、歴史の歯車を逆回転させるような動きを見せたのはなぜだろうか。尊王攘夷の中心勢力であった薩摩も長州も実は西欧諸国から武器を購入したり、ひそかに留学生を派遣したりして西欧諸国とのつながりを強めていた。攘夷を唱えた勢力は鎖国を指向していたというより、幕府を追い詰める口実として

利用したのではないだろうか。事実薩摩は生麦事件の犯人を隠し通したにもかかわらず薩英戦争の後すぐにイギリスと手を握っている。

薩摩や長州は開国を視野に入れて着々と手を打ちながら、鎖国という常識にとらわれた庶民に受け入れやすいスローガンとして攘夷をとらえたときと考えるのがもっとも理解しやすいのではないだろうか。

頑迷な朝廷の公家たちを説得するため、京都で活躍していた佐久間象山を暗殺したのは、尊王攘夷にかぶれた熊本藩士河上彦斎(げんさい)であった。

幕府の権力が強力だったころなら、幕府が決定して発表すればそれで済んだのだが、すでにこの頃の幕府は弱体化しており、諸大名の意見を求めたり、条約の調印に朝廷の許しを求めるなどということろまで、徳川の力が後退していたのである。

事実上、幕府は自分の手で鎖国に終止符をうったわけだが、実は鎖国の常識はそんなに簡単には消滅しなかった。

現実の歴史は、尊王攘夷を掲げる西南雄藩の軍勢力によって、開国を主導した幕府が倒されるという驚くべき展開を見せた。薩長を中心とする勢力は幕府を倒して明治新政府をつくるが、新政府は今までの尊王攘夷のスローガンは忘れたかのようにあつという間に文明開化に舵を切った。当時のひとびとはマニフェストはどうしたと新政府をなじるようなことをせず、さっさと鎖国の常識を忘れて新しい常識、文明開化にとびついていったのである。

鎖国の常識は多くの犠牲を払ってやっと払拭されたのであった。ただし、キリシタンの禁止がまだその後も続いたことは、本論文の冒頭に触れた通りである。鎖国の常識が完全に払拭されるためには、萩など各地に幽閉されていたかくれキリシタンが解放される明治6年まで待たなければならなかったのである。

冬、それは生きとし生けるものの生命の継続にとって不可欠な季節である。すべて生けるものは古き命の枯れゆく秋と新しい命の躍動する春の間にある冬において新旧の命が交代し、新

しくよみがえるのである。

組織もまたこのとき新旧を交代させようとする。しかし、怠惰で愚かな人間の組織にあっては、その際生じる葛藤により組織が朽ち果ててしまうことがある。そうならないためには、組織はこの冬において古い考え方や勢力を速やかに退場させ新しいそれを育てていなければならない。この意味で、組織の冬は組織の継続そして再生にとってきわめて重要なのである。

組織の適応モデルによれば、組織の冬は、組織の盛衰サイクルの第4の保守局面後期である。このころになると、それまでの常識が環境の変化にいよいよそぐわなくなり、組織はさらに衰退の度を深めていく。想定外の事柄が頻繁に生じ、多くの人たちが不安を募らせる。そうした中で、組織の行く末に危機感を抱く先駆的な人たちが、互解を形成・広めあるいは常識に反する事を果敢に試みたりする。しかし、現在の常識や既成の秩序、制度のもたらす既得権益を享受している守旧派の人たちは、こうした新しい動きに激しく抵抗し抑え込もうとする(始末の悪いことに、こうした反応はむしろ自然のようだ)。ここに先駆派と守旧派の組織の存亡をかけた闘いが開始される。動乱期前期と称するゆえんである。

そこで、江戸時代の冬である。組織の適応モデルによれば、組織の冬は、それまでの常識が変化する環境にいよいよそぐわなくなっていくときである。正にその通りで、参勤交代は、すでにその使命を果たし、あまつさえ当初の意図に反するように機能してさえいる。また、米本位制は、経済発展の大きな足かせとなっている。そして、身分制度はますます形骸化していつている。

しかし、環境変化に最もそぐわなくなったのは、鎖国の常識である。すなわち、欧米列強の度重なる開国要求に鎖国は急速に通用しなくなっていったのである。

本稿では、その経緯を

1. エカテリーナ号の来航からアヘン戦争
 2. アヘン戦争からペリーの黒船来航
 3. ペリーの黒船来航から開国
- の3つの時期に分けて述べている。

組織の適応モデルはまた組織の冬において先駆派と守旧派が互解をめぐって激しい闘いを展開する、としている。これもまさにその通りである。海防の必要性を説いた林子平は時の老中筆頭松平定信によってその書の出版を差し止められた。さらに鎖国の政策を批判した渡辺崋山や高野長英は捕えられ、特に長英は脱獄し、6年間の潜行の後悲惨な最期をとげている。いわゆる蚕社の獄である。また、洋式砲術家の高島秋帆は守旧派の手先鳥居耀蔵の執ような追求によって10年間の入獄を余儀なくされた。

寛政の改革が終了した1801年から大政奉還の1867年までの江戸時代の冬、我が国は終始欧米列強の脅威にさらされていた。この危機的状況において興味深い事柄がある。一つは幕府のトップが危機意識の乏しい11代将軍家斉で、それが50年もの長きにわたったことである。もう一つは化政文化の隆盛である。

寛政と天保の両改革の間に花咲いた化政文化は、寛永文化から数えて180年、元禄文化から100年余の長きにわたる江戸文化の滔滔とした流れが寛政の改革の締め付けから一気に開放され、それまでの蓄積を集大成した結果ととらえることができよう。

一方、11代将軍家斉のノー天気ぶりにはあきれるが、将軍職の継承における能力よりも血統というルールとなるべくしてなった結果といえる。

それはともかく、家斉治世下の放漫財政のため庶民の暮らしは苦しくなりやがてそれが大塩平八郎の乱を招き、無秩序になりかねない世情に徳川幕府の危機を感じ綱紀肅正を図ったのが水野忠邦の天保の改革となったと思われる。

その後、鎖国から開国への転換をめぐって、朝廷も巻き込んだ尊皇攘夷の熱いうねりに乗った倒幕運動そして徳川幕府崩壊、明治維新へと至って、江戸時代の冬は終わる。

ここで、何故あの時に攘夷だったのかという疑問が残る。組織の適応モデルによれば、それは鎖国という常識の過剰学習の結果であるとみなすことができる。常識はややもすると過剰に守られ学習されやすい。しかし、この傾向にさらに拍車をかけたのは「依らしむべし、知らし

むべからず」という幕府の当初からの方針であったとすれば、これこそ歴史の皮肉という他ない。

一般に、「危機のときにこそリーダーの資質が問われる」といわれている。その点で、家斉は落第である。しかし、組織の冬は、新旧の交代のときで、それがスムーズに行われるためには、新しい思想や勢力が古いそれに抗しう程に育っていなければならない。とすると家斉政権下の野放図な治世は、絢爛たる化政文化に象徴されるように新しいエネルギーを育んだとも考えられる。こうしてみると、家斉の50年の治世もあながちネガティブに評価できないのではないか。

この考え方をさらに推し進めると次のようなおもしろいことがいえる:「組織の冬においては、凡庸なトップの方が良い」。なぜならば、古くて通用しがたくなっていく常識はなまじ鋭いトップよりは鈍いトップの下の方が速やかに廃たれてゆき、組織の再生をスムーズにするからである。その点、徳川幕府12代將軍家慶、13代將軍家定、14代將軍家茂はそろいもそろって決して優秀とはいえなかった。これは、徳川幕府にとってはともかく日本という組織にとって、天の配剤というべきだろう。

最後に、15代將軍徳川慶喜は、鳥羽・伏見の戦いで優勢な戦力を有しながら闘かわずに江戸に逃げ帰った腰抜けと揶揄されている。しかし、彼が「新旧勢力のスムーズな交代なくして、日本という組織の滞ることのない継続そして再生はありえない」と考えたうえでの無抵抗だったとしたら、彼は稀にみる英明な「最後の將軍」といえる(最近のエジプト、リビアそれにシリアのニュースに接するたびにこの感を深くする)。

ということで、江戸時代の春將軍は家康、夏將軍は綱吉、秋將軍は吉宗とすれば冬將軍は徳川慶喜となろう。

〔参考文献〕

青木美智男 (1993) 『大系日本の歴史 11 近代の予兆』 小学館

石井寛治 (1993) 『大系日本の歴史 12 開国と維新』 小学館

犬塚孝明 (2011) 『海国日本の明治維新』 新人物往来社

大平喜間多 (1959) 『佐久間象山』 吉川弘文館

加藤祐三 (1988) 『黒船異変』 岩波新書

北島正元 (1969) 『水野忠邦』 吉川弘文館

高橋克彦 (1992) 『江戸のニューメディア』 角川書店

中村彰彦・山内昌之 (2009) 『黒船以降』 中公文庫

藤田 覚 (1994) 『水野忠邦』 東洋経済新報社